

# 18世紀スコットランドの景観と連合王国

— *Paul Sandby: Picturing Britain* 展によせて—

Scottish Landscape and the Union in the 18<sup>th</sup> Century – dedicated to  
*Paul Sandby: Picturing Britain, A Bicentenary Exhibition*

赤瀬理穂

英語コミュニケーション学科非常勤講師

キーワード：ポール・サンドビィ／軍事測量／スコットランド／イギリス／連合王国／  
ジャコバイト／1707年合同／アイデンティティ／ピクチャレスク／ツーリズム

Key words : Paul Sandby, Military Survey, Scotland, Great Britain, United Kingdom, Jacobite,  
the Union of 1707, National Identity, Picturesque, Tourism

## はじめに

2010年3月13日から6月13日にかけての3ヶ月間、ロンドンの王立美術院において *Picturing Britain* と題するポール・サンドビィ Paul Sandby RA (1731-1809) 展が開催された。この企画展は王立美術院設立メンバーであるサンドビィの没後200周年を記念したもので、彼によって「絵画化されたイギリス」がそこに展示されていた。それらはブリテン島の各地—イングランド、ウェールズ、スコットランドの自然、田園、都市の風景、そして人びとの生活などをありありと描写した、いわば18世紀後半のイギリスの「記録」であり、なかでもハノーヴァー朝国家のもとにあったスコットランドに関する「調査記録」は非常に興味深いものであった。

一般に「英国水彩画の父」として広く知られるサンドビィだが、彼の経歴は地図製図工として始まっている。兵器省製図室 Board of Ordnance Drawing Room が置かれていたロンドン塔で修行を積んだ後、彼は1747年に軍事測量部隊の一員としてスコットランドへ派遣された。この測量は1745年ジャコバイト蜂起の後にフランスの侵攻を懸念しておこなわれた軍事調査で、測量に基づいて地図を作成することが彼の任務であった<sup>1</sup>。 *Picturing Britain* のスコットランド部門には、この踏査関連のものが展示されていたのである。具体的にはグレイト・マップとよばれるその地図の

---

<sup>1</sup> これが現在の英国陸地測量部 Ordnance Survey の前身である。

一部とジャコバイト軍を破ったカローデンの軍隊配備図、その野戦地、フォート・オーガスタスの兵営(図1)、エディンバラの街頭を連行されるジャコバイトなど、サンドヴィ兄弟が描いたスケッチがあった<sup>2</sup>。

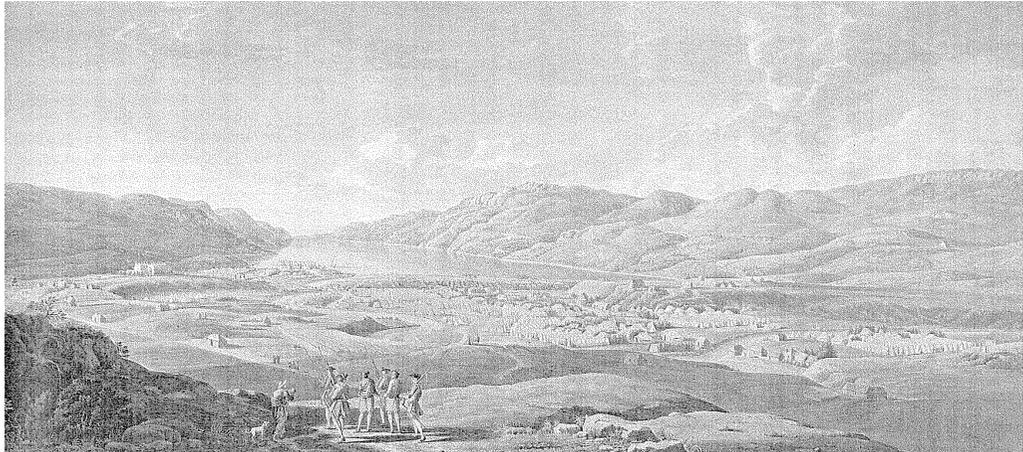


図1 フォート・オーガスタスの兵営 Thomas Sandby, *Fort Augustus*, c. 1746  
出典 : Bonehill and Daniels, *Paul Sandby: Picturing Britain*, p.79.

これら一連の作品は、フランスの脅威、つまりカトリックという「他者」と対峙することで、プロテスタント体制国家下のイングランド人、ウェールズ人、スコットランド人が「われわれ」意識によって一体感をもち、イギリス人意識が醸成されたと論じたリンダ・コリーの『イギリス国民の誕生』を想起させるものであった。

1707年にスコットランドとイングランドが連合しグレート・ブリテン王国が誕生したが、その直後において合同法は単なる紙上の契約にすぎず、イングランドとスコットランドの統一体が実体をなしたのは1746年以後といったほうが妥当との見解がある<sup>3</sup>。1745年にジャコバイトによる反乱が再発したことで、政府はカトリックのジャコバイトが多く住むスコットランドのハイランド地域を制圧し、その社会の基礎をなす氏族制度を解体して「連合」体制の強化を図った。「他者」を内包したスコットランドは軍事調査の対象となり、これによってグレート・ブリテン王国の領土としてのスコットランドの地図が作成された。そしてスコットランドの風景は、サンドヴィが描いた絵によってイングランドの人びとに知られるところとなったのである。

スティーヴン・ダニエルズは「国を想像するということは、その地理を頭のなかに描くこと」であり、国境や特定地域の風景全体像、首都や地方の町、旧跡などの地理的情報は、「国」を思い浮かべる過程においてその領土の限定を容易にすると述べている<sup>4</sup>。それらの情報は実物を目にする

<sup>2</sup> ポール・サンドヴィの兄、Thomas Sandby はカンバーランド公爵専属の製図工であった。彼は公爵に伴ってカローデン入りし、戦場や軍隊配備図などを描いた。図1参照

<sup>3</sup> Broun, p.146.

<sup>4</sup> Daniels, p.112.

ることはもちろん、地図、記述、絵などから得ることも可能である。そしてこのような手段で得られる自国の地理知識は、自国意識やナショナル・アイデンティティの形成に繋がるといわれている<sup>5</sup>。

これらのことを考慮すると、対カトリック意識は「イギリス人」意識だけではなく、「イギリス」という空間に属する地理的一体性意識、換言すれば、単なる地形としてのブリテン島ではなく、国家を形成するグレート・ブリテン島という領土への帰属意識の形成にも影響を与えたといえるのではないだろうか。18世紀においてイギリスの人びとはスコットランドをどのように認識し、またグレート・ブリテン王国をどのように認識していたのか。

本稿では、18世紀にスコットランド、主にハイランドに足を踏み入れた者の絵や旅行記などに書かれたスコットランドの地理的情報を中心として、旅における彼らの経験、それらが「書かれた」背景、また、「書かれたもの」が人びとに与えた影響を検討し、当時のイギリスの人びとの意識のうえでのスコットランドとイングランドの地理的統合について確認したい。

なお本稿が取り扱う時期は、1707年合同からマス・ツーリズムの時代が始まるまで、より正確には、ハイランドにおいて軍用道路の建設が始まった1725年から、「ロマンス」を求めるスコットランド旅行の火つけ役となるウォルター・スコットが、ウェイバリー小説を発表する以前の1810年までとする。また、本稿では上記期間における「イギリス」の国名をグレート・ブリテン王国 the Kingdom of Great Britain (1707-1800)ではなく、イングランドとスコットランドの「連合」によってプロテスタントの王位継承がより確実にしたことを強調するために、その別称グレート・ブリテン連合王国 United Kingdom of Great Britain を採用して「連合王国」と記す。

## 1. ハイランドの軍事的景観

1707年合同後のスコットランドの景観は、老王位潜称者として知られるジェイムズ「8世」(スコットランド王)を支持するジャコバイトの1715年反乱を契機として、その様相を変えることになる。イグランドとの国境に近く、敵対しながらもイングランドと密接な関係にあったローランド地域と、その北部にあって「非常に山が多く、土地の者を除けばそこに足を踏み入れることはほぼ不可能」なハイランド地域は、同じスコットランドの地を分かち合っているとは言い難いほど地理的、文化的、宗教的、社会的に隔絶していた。この反乱は鎮圧されたものの、再起どころか大陸のカトリック勢力によるブリテン島上陸の可能性もあったため、「道路や橋が欠如しているために余計に手に負えない」「[連合]王国のなかのその地域をうまく治める改善策」がハノーヴァ朝国家に必要であった<sup>6</sup>。そのため、カトリックの王位継承阻止を図った名誉革命体制を脅かすジャコバイティズムの根城といえるハイランドを中心として、最高司令官に任命されたジョージ・ウェイド(オーストリア継承戦争以後、陸軍元帥)の指揮により、1725年から軍用道路、軍隊駐留地、要塞や橋の建設が始まった。そして

<sup>5</sup> Withers, p.1.

<sup>6</sup> Taylor, pp.17-18.

1767年までには、合計して約1,000マイルの道路がスコットランドに建設されたのであった(図2参照)<sup>7</sup>。

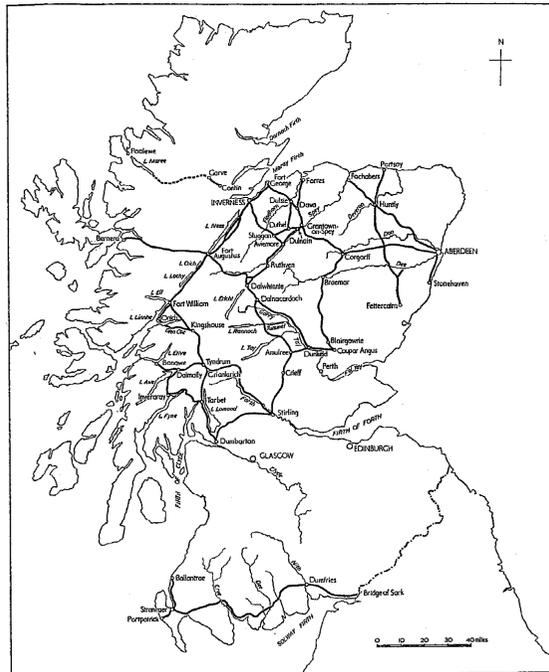


図2 1725年から1767年にかけてスコットランドに建設された軍用道路  
出典：Taylor, *The Military Roads in Scotland*

しかしながら老王位潜称者の息子、チャールズ・エドワード・ステュアート率いるジャコバイトが1745年に再び蜂起してエディンバラを占拠し<sup>8</sup>、その後イングランドのダービーまで進攻してハノーヴァ朝国家を震撼させた。翌年、カンバーランド公爵が政府軍とともにハイランドへ進軍すると、指揮官たちはその地域の「厳密な踏査の必要性が明らかになり非常に困惑した」。部隊を率いてスコットランド入りしたものの、地図を入手することができなかったある将官が「私は闇のなかを進んでいる(傍点引用者)」と書き残しているように、要求を満たす地図がなく、「不完全な」地図でさえ数が不足しているうえに、山々によって「外部」から閉ざされた未開地ハイランドは、まさしくハノーヴァ朝連合王国の「闇」であった<sup>9</sup>。

こうしてカンバーランド公爵はカローデンで勝利を取ると、父ジョージ2世に嘆願してスコットランドにおける軍事測量に着手した。1747年から1755年にかけて、「自然が行く手を阻む国を徹底的に調査し、白日のもとにさらす(傍点引用者)」(後述のウィリアム・ロイの言葉であ

<sup>7</sup> 1740年までにウェイドは約250マイルの道路と40の橋を建設し、それ以後は主としてウィリアム・コールフィールド William Caulfeild がその建設監督を担った。Rackwitz, p.179; Taylor, *op. cit.*

<sup>8</sup> ジャコバイト軍が短期のうちにローランドへ到達できたのは、皮肉にも、ハイランドに建設された軍用道路を使ったからだった。Rackwitz, *op. cit.*

<sup>9</sup> Royal Geographical Society, pp.104-105.

るが、ローランド人にとってもハイランドは「隔絶」した地域であったことが理解できよう) ために推進されたプロジェクトの監督には、中佐デイヴィッド・ワトソンが任命され、彼の右腕的存在となるスコットランド人ウィリアム・ロイ (ローランドのラナークシア出身) が実地測量と地図化の指揮を担った。そして、サンドビィはチーフとして地図の製図にあたったのである<sup>10</sup>。

この地図はその性質上、即座に地勢を理解させ、軍隊の動きを容易にするものでなければならなかった。そのような地図を描くためには、視覚に訴える三次元描写が最も有効と考えられていた。グレイト・マップにみられるように (図3参照)、色の濃淡で土地の起伏・高低を表わしたサンドビィの手法は、土地の状況を把握しやすい鳥瞰図のような地図を作りあげている<sup>11</sup>。



図3 グレイト・マップ

The Board of Ordnance, *Part of the Reduction from the Great Map, shewing the Kings Road which is express'd by a Red Line, & the Country Roads by a Brown Line*, c. 1753

出典: Bonehill and Daniels, *Paul Sandby: Picturing Britain*, p.86.

また興味深いことに、自分の前途を暗示するかのごとく、彼は測量図に「風景画」も採り入れている。この踏査・測量はハイランドを「連合」体制へ統合させる軍事行動の一部であったため、軍用道路建設プロジェクトと関連していた。アーガイル地方の城の修復のために、ワトソンは建造物の構造や城が位置する沿岸部などについて報告書を提出しなければならなかったが、城の平

<sup>10</sup> Bonehill and Daniels, pp.14, 82. 当初はハイランドを中心とした北部のみの計画だったが、のちに南部スコットランドの一部も対象になり、1752年から1755年に測量がおこなわれた。Christian, pp.19-20.

<sup>11</sup> Great Map は National Library of Scotland のウェブサイト上で公開されている。

面図と沿岸部の地勢図、そして城とその周辺の山と海を描いた風景画を併せた図をサンドビィが報告書用に作成している<sup>12</sup>。

だが当然のことながら、グレート・マップを目にした者は軍事関係者などのごく一部に限られていた。その一方、サンドビィの画は、より広い範囲のイングランドの人びとに「スコットランド」を視覚的に知る機会を与えた。サンドビィは手が空くと測量の様子や関係者、ハイランドの風景などを描いた。また、エディンバラで製図にあたった測量が不可能な冬期には、エディンバラ城や周辺の風景、そして人びとの日々の暮らしなどをスケッチした。サンドビィは描いた絵を友人たちに送っており、彼らはそれを自分の出版物に使ったりした。任務を終えイングランドへ戻ったのち、サンドビィは絵によって描写した「スコットランド」をロイヤル・アカデミーに出品し、1778年にはスコットランドの風景版画を取めた *Virtuosi's Museum* を出版している<sup>13</sup>。

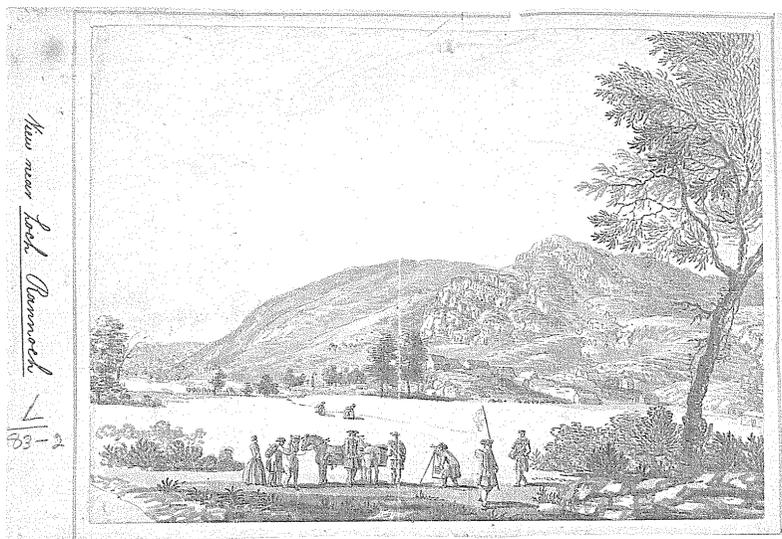


図4 測量風景 *Surveying Party by Kinloch Rannoch*, 1749  
出典 : Bonehill and Daniels, *Paul Sandby: Picturing Britain*, p.87.

このようにして、連合体制を揺るがす可能性をもった「闇」は切り開かれ、精査され、地図化されることによって「白日のもとにさらされ」た。そしてイングランド人（ウェールズ人を含む）にとってのかつての外国、スコットランドは絵によって視覚化されたことで、後述のようにイングランドの一般の人びとの前で「白日のもとにさらされ」た状態になるのである。

## 2. スコットランド探検

18世紀中庸以前においては、軍事目的や牛追い、狩猟などを除くと、娯楽や自然科学的興味からハイランドを訪れるイングランド人、またローランド人はほとんどいなかった。それでも旅した者は、「暗闇のような荒野、沼と大きな岩だらけで木がほとんどなく、人間の居住には到底適さ

<sup>12</sup> Fleet, p.37; Holloway and Errington p.34.

<sup>13</sup> Klunk p.71; Holloway and Errington, pp.33-42.

ない」と畏怖をもってハイランドを評した。たとえばダニエル・デフォーのように「文化的、地理的にも近づきたい恐ろしい地域」と感じなくても、軍用道路建設メンバーは「いたるところがごつごつした岩石層で、外観は[どこもかしこも]まったく同じ」と捉え、ローランド人ですら「[自分の]両側には未開地域である山以外は何も見ることができない」と、そこに「荒涼とした」「未開の」地のほかには何も見出していなかった<sup>14</sup>。

しかし、『オシアン』が発表されたところにサンドビの絵が人びとの目にふれるようになると、オシアンの舞台、あるいはサンドビが描いたスコットランドのイメージを求めて北上する者が増えはじめ、それをもとに執筆された旅行記がまた人をよぶことになった。そして1785年以降、王立美術院の展覧会にはスコットランドの風景画が毎年のように出品されるようになっていた<sup>15</sup>。

サンドビと交流があったウェールズ人のトマス・ペナントは、サンドビに刺激を受けて1769年と1772年の2回にわたってスコットランドを探訪し、2冊の旅行記を出している。一度目の旅を記した『スコットランド紀行』は好評を得て、1790年までに5版を重ねた<sup>16</sup>。

その旅行記は、言い換えれば彼の博物学研究者、好古史家としての眼を通じて観察され、耳を通じて収集されたスコットランドについての記録である。訪れた先々の地理や風景、歴史、建築物、産業、商業、衣食住を含む人間、動物、植物などについて詳細が記され、風景とともに動物や遺構などのスケッチが挿入されている。彼は特に「いまだに存在する大昔の慣習や迷信」といったハイランドの民俗に興味を示し、ハイランド地域から「ばかげたこと」が「消えつつある」現在、それらを書き残すことは価値があると、「いまだ信じられている」亡霊の奇談、捧げものの慣わしや弔いの儀式、妖精という俗信を記録している<sup>17</sup>。

『スコットランド紀行』のなかには「グレート・ブリテン」という表記が散見するので、彼が連合王国への帰属意識を有していることがわかる。しかしハイランドのある葬式の風習を、北ブリテンでは見たことはないがアイルランドではあると記してあり、彼はスコットランドのなかにアイルランドと同じ「異国」を見出していることが理解できる。ペナントはスコットランドの自然景観を賛美してはいるが、それよりも未知なるものに対する興味が強く、内国の「異国的なるもの」を探検しにスコットランドへ赴いたといえる。このことは、1773年にハイランドとヘヴリディーズ諸島を巡ったサミュエル・ジョンソンの言葉、スコットランドに「美しい場所を見に来たのではない。それらはイングランドに十分にあるのだから。荒々しいもの、山々、滝、独特の風習といったこれまで見たことのない、[イングランドの生活に]欠いていたものを見にやって来たのだ」<sup>18</sup>のなかに同じ要素を読み取ることができる。

それではペナントは、1707年合同をどのように認識しており、この旅においてどのような経験をし、何を思ったのだろうか。辿ったルートすべてではないが、ペナントのスコットランド「探検」は、かなりの部分を軍用道路の恩恵にあずかっている。ペナントはウェイドが建設した道路

<sup>14</sup> Bonehill and Daniels, p.75; Butler, p.373; Smout, p.99.

<sup>15</sup> Bonehill and Daniels, *loc. cit.*; Klunk, p.74.

<sup>16</sup> Klunk p.71; Grenier, p.16; Holloway and Errington, *loc. cit.*

<sup>17</sup> Pennant, pp.89-96.

<sup>18</sup> Smout, p.101.

や橋を使ったこと、要塞やウェイドが寝泊りしていた小屋を訪れたことを単に記すだけでなく、建設にまつわる話などに言及し、ウェイドが最も誇りとしていたテイ橋（その要石にジョージ2世の王冠が印されている）では、彼へ賛辞を呈する碑文をも書き写している。

感服すべき軍用道路

(中略)

ローマ人の[築いた]国境を越え  
原野（ムーア）と沼地に屈せず  
岩々と山々を切り開く

(中略)

困難を伴った技術作業  
兵士たちの10年の歳月をかけて  
G. ウェイドによって1733年に完遂す<sup>19</sup>

それどころか、険しく荒れた山岳地帯の「開拓」をピレーネ山脈やアルプス山脈越えにたとえてか、ウェイドがハンニバルの再来かのような賞賛ぶりである<sup>20</sup>。

さらに彼は、ことあるごとにジャコバイト蜂起、カンバーランド公爵の進軍や、インバネス北部とフォート・ウィリアムを結ぶ軍用道路の要所にある要塞—それぞれ国王とカンバーランド公爵ウィリアム・オーガスタスの名前にちなんで名づけられたフォート・ジョージとフォート・オーガスタス。オレンジ公に由来しているが、ウェイドによって再強化された際にカンバーランド公爵の「ウィリアム」に変換されたフォート・ウィリアム—についてふれ、また1746年の反乱軍に対するフォート・ウィリアムでの政府軍の防御を称えている<sup>21</sup>。このように、『スコットランド紀行』のいたるところに、プロテスタントの優勢が示されているのである。彼はスコットランド、特にハイランドの景観の随所に新たに加わった道路、橋、碑、そして地名から、カトリックを制したプロテスタントの勝利を認識していたのである。

ペナントは蔑みをふくませて、スコットランドの「この地域の住人ほとんどがカトリック教徒 papists で、そこに反乱の原動力があったのだ」と書いている。カローデンを「1746年4月16日の勝利によって、北ブリテンが今ある豊かさの恩恵を負った場所」とよび、パースの町の繁栄ぶりを見て1745年の「反乱自体は暴力的騒乱だったが、結果として有益だった」とも述べている<sup>22</sup>。

ペナントはプロテスタントのハノーヴァ家王位継承を支持しており、彼にとってスコットランド、正確には「カトリックのハイランド」は制圧され、監理下に置かれてしかるべき場所だった。「カトリック」要素がスコットランドのなかに存在する「異国」性を増長させたのかもしれない

---

<sup>19</sup> Pennant, p.81.

<sup>20</sup> *Ibid.*, p.184.

<sup>21</sup> *Ibid.*, pp.177-178.

<sup>22</sup> *Ibid.*, pp.72, 177.

いが、それは「消えつつある」状態であり（消失する運命にあるものだから「書き残す価値がある」）、ユニオニストのペナントはこの探検によってスコットランドの景観のなかに、ハノーヴァー朝国家のもとでの連合体制 — 国制上の「連合」、そしてカトリックの王位継承阻止を図った名譽革命体制という意味でのスコットランドとイングランドの「連合」でもある — の確立を確認できたことを喜び、スコットランドの連合への貢献と、それによってもたらされたスコットランドの繁栄を評価しているのである。

### 3. ピクチャレスク・スコットランド

ペナントやジョンソンのように「異国的なるもの」を求めて「探検」しにスコットランドを訪れる者がいる一方で、また別のテーマをもつ旅行者の姿があった。18世紀半ばを過ぎると、「自然」やその景観に対する人びとの意識に変化がおこっていた。それまで人の手が入っていない「自然」は「危険で恐ろしいもの」とみなされ、そこに美しさをみいだす者が稀有であったことは前述のとおりである。ここでは、「ピクチャレスク」美学を論じたウィリアム・ギルピンによるスコットランド旅行を取り上げて、「美」の視点からスコットランドの自然景観にアプローチする。

ギルピンは「ピクチャレスク」を主に用いて風景を表現し、賛美するスタイルをとっていた。この用語は彼が発明したものではないが、それまで曖昧であった概念から一貫した美学理論を構築し、さらにその理論を特定の場所に当てはめて評論をしたために、ピクチャレスクを探求する旅行に多大なる影響を与えた。彼が旅した地域は、ピクチャレスク絵画の題材を求める画家を含む旅行者たちのあいだで人気の場所になったのだが、スコットランドもこの例外ではなかったのである<sup>23</sup>。

どちらかといえば人間に観察眼を向ける傾向にあったジョンソンは、スコットランドの自然景観に対して「寒々しく」「不気味」という感想をもち、繰り返し「木が少ない」ことに言及して多くのスコットランド人から非難をかった。ジョンソンの旅の同伴者であり生涯を通じて友人関係にあったスコットランド人のジェームズ・ボズウェル（ローランドのエディンバラ出身）は、「生気を与える人間の存在がなければ、どのような類の景観、または風景も不完全である」と旅を振り返っているように、彼にとっても「ありのままの自然」は「美」ではなく、「人の手が入っていない」「野蛮」な「未開地」であった<sup>24</sup>。

彼らのスコットランド探訪から3年後、スコットランドを旅したギルピンは、「木が少ない」というジョンソンを「とげとげしい」と批判し、スコットランドの景色に「ビューティフル」（自然の状態にあって喜びを感じさせるもの）、「サブライム」（自然の状態にあって心を揺さぶり、畏敬の念を抱かせるもの）、「ピクチャレスク」（芸術的な「絵」として表現できうるもの）の要素をみいだして彼に反論している。ウェールズと湖水地方に続いて1776年にスコットランドを訪れたギルピンの最も印象に残るその風景の特徴は、「完全なる自然のままの状態」— イングランドでしばしば見られる石壁などの文明の形跡がない— で広大な地が続いていることであった。スコットランド、特にハイランドの「景色の貧弱さ」は「シンプリシティ」に換言され、「未開」や「野性」

<sup>23</sup> Whitrey, pp.37, 47.

<sup>24</sup> *Ibid.*, p.37.

と同じくサブライムと解釈されたのである<sup>25</sup>。

スコットランドの風景にとって木は重要な存在ではなく、山、湖、川が精華だとギルピンは述べている。スコットランドの山の形は変化に富んでいるが、どれもピクチャレスクで、不快な形の山はほとんど見られない。山そのもののラインはエレガントと評し、彼は特に青い山の連なりを気に入っている。湖にはそれを引き立てる「装飾がほとんどない」が、大きく弧を描くライン、入り江、島、山の遮蔽、それらすべてが最上のスタイルにある（城は人工物なので除外された）ゆえ、そこに木の必要性がないのである。風景の鑑賞の仕方について学ぶのであれば、これほど好都合な場所はないとも述べている。さらには透明度の高い湖水地方の湖を引き合いに出して、スコットランドの湖は苔色をしていて湖面は鮮明に反映しないかもしれないと説明するが、きらきらと輝くよりもスコットランドのムーアのような土地と見事に調和すると述べている。川はどれも美しく、急流が岩にあたって飛沫をあげる真正正銘の「古典的な川」だと彼は称している。また彼は河口に言及し、イングランドの川はどれも河口が広すぎて不均衡だと評し、山に遮られて細い流れのまま適切な広さを保ち続けているスコットランドの川に軍配をあげている。そして、ハイランドの風景に漂っている陰鬱でも悲しい雰囲気はピクチャレスクではないが、それが「隔絶」や「壮大さ」を醸し出し、景色を吟味する旅行者の想像力を刺激するとつけ加えている<sup>26</sup>。

このようにして、スコットランドの風景はギルピンの美学理論に基づいて論じられ、定義づけられ、そして評価された。「風光」と判断されピクチャレスクの範疇に入れられた結果、スコットランドの風景に価値が生じたのである。彼は読者を想定し、『スコットランドの観察』のなかでスコットランドのどこを旅して、何をどのように観て、いかに価値を認めるべきか指南をしており<sup>27</sup>、これがさらにスコットランド旅行の普及を促したと考えられる。

『スコットランドの観察』は、いわば芸術としてのスコットランドの風景の「鑑定」記録であるが、それでもギルピンが体験した「連合王国の地理」がところどころに見受けられる。彼が訪れた場所のいくつかは旧跡や史跡であり、その場所にまつわる歴史をわずかながら説明している。たとえばバノックバーン：ロバート・ザ・ブルースのスコットランド軍がイングランド軍を破ったバノックバーンの戦い、パース：クロムウェルのスコットランド侵攻、スクーン：かつてこの場所に置かれスコットランド王の戴冠に使われていたスクーンの石（運命の石）と、それをはめ込んだ玉座が置かれているウェストミンスター・アビィなど<sup>28</sup>。つまりギルピンは、それらの場所に連合王国を形成するスコットランドとイングランドの共通の歴史を見出していたのである。

地形を説明するにあたって、彼は幾度か「スコットランドで最も」という表現を用いている。タインドラムにおいてギルピンは、そこを人が住んでいる場所としてスコットランドのなかで最も標高の高い所のひとつだと紹介しているのだが、スコットランド人にそう説明されたらしく、

<sup>25</sup> Gilpin, vol.2, p.111; Smout, pp.101-103; Whitrey, pp.43, 53.

<sup>26</sup> Gilpin, vol.2, pp.127-133.

<sup>27</sup> Whitrey, p.38. 原題は *Observations on the Highlands of Scotland* であるが、「観察」はローランド地域も含まれるため『スコットランドの観察』と訳す。

<sup>28</sup> Gilpin, vol.1, 86, 108, 111.

その後「グレート・ブリテンのなかで、という者もいるが」とつけ加えている<sup>29</sup>。スコットランドに「負けた」ことを認めたくないイングランド人としての心情が出てしまったと思われるが、彼は旅の地がスコットランドであると同時に、連合王国でもあることも理解していたのである。

彼はペナントと同じく、軍用道路を使って旅をした。ジョンソンは道の悪さについて書いているが、当時はまだインバネスを越えてハイランド北部や島嶼部へ向かう人は少なく、すべてが快適だったわけではないだろうが、軍用道路を評価する旅行者の記述もいくらか残されている。また、旅行者が「お陰」を蒙ったのは軍用道路だけではない。1745年蜂起後に氏族制度が解体されると無法地帯に秩序が生まれて、盗みや強奪の話は滅多に聞かれなくなり、今ではスコットランドのどんな所でも旅ができるだろうとギルピンは記している<sup>30</sup>。ハイランドに追剥ぎが横行していたという情報の真偽はともかく<sup>31</sup>、「連合」体制確立の恩恵を彼自身が実感したことは確かである。

しかしながら、ギルピンの真情は次の一言につきるだろう。テイマスへ向かう途中、道を失った彼はウェイドが建設した橋を使い、6マイル遠回りをするようになったが、そこで彼は思わぬ景色に出くわす。「われわれがかなり幸運だと思える理由ができた。われわれが何を失ったかはわからない。しかし、われわれが手にした国は、際立って美しかった。(傍点引用者)」<sup>32</sup>

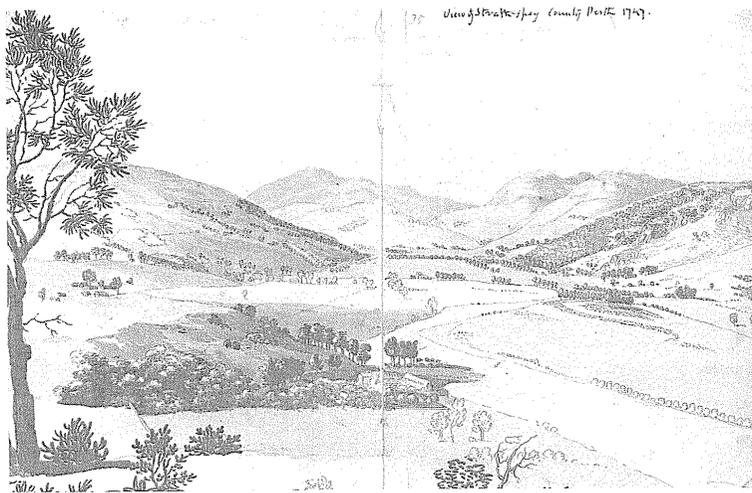


図5 確認できないが、川の奥にウェイドが建設したテイ橋が描かれているらしい。

ギルピンが感動した風景はこのあたりか。 Paul Sandby, *Strath Tay*, 1747.

出典：Malcolm, *The Search for the Picturesque*, p.218.

<sup>29</sup> *Ibid.*, vol.1, p.174.

<sup>30</sup> *Ibid.*, vol.1, pp.209-210.

<sup>31</sup> Rackwitz, pp.176-179.

<sup>32</sup> Gilpin, vol.1, pp.151-152.

ペナントとは異なり、ギルピンはスコットランドに「異国」を見出してはいなかったが、それを「われわれイングランド人が獲得した領土」と認識していた。スコットランドの風景が彼によって評価され、その評価が旅行者の流れをつくったことを考慮すると、スコットランドの自然景観はピクチャレスク趣味によってイングランド人が獲得したものといえるかもしれない。

#### 4. スコットランド人によるスコットランド旅行

これまでイングランド人の目に映ったスコットランドの地理や景観を追ってきたが、スコットランド人の目にそれらはどのように映っていたのだろうか。ペナントが「最近になってようやく北ブリテン人は自分たちの国の風景の美しさに気づいた」と記してあるが<sup>33</sup>、彼らもイングランド人と同じ景観の見方をし、同じ地理認識をもっていたのだろうか。

この時期、イングランド人と同じように、少なくとも数人のスコットランド人がスコットランドを旅していた。そしてそのなかには、スコットランド旅行を奨励するために、自らの経験をもとにガイドブックや旅行記などを出版する者もいた<sup>34</sup>。10年の歳月をかけてスコットランド各地を旅したスコットランド人ロバート・ヘロン（ローランドのニューギャロウェイ出身）は、イングランド人向けに『描写されたスコットランド』、スコットランド人向けに『記述されたスコットランド』というスコットランド地誌を出版している。両書とも、スコットランドの地理と歴史の概略の後に、スコットランドをシアあるいは郡ごとに分けた各地域を詳述している。

スコットランド人向けの書の序文において、彼は「愛国心！公共心！祖国への慈しみ！」と謳ったのち、自分たちの「国」スコットランドをよく知らなければ、そのような感情は生まれず愛国者になることはできないと書き、そして

この国の住人が、大都市のコックニーたち以上の偽りない愛国者になることを当然ながら期待すべきである。われわれの国の大地が披露している美しく気高い景色を、これまで恍惚と眺めてきた者（中略）だけが、真の、だが決して心は狭くないスコットランド人にふさわしい誠実な愛情・忠誠心を持つことができる

と愛「国」心の鼓舞を図っている。愛国心を含む美德がスコットランドの繁栄と発展を維持するのだから、愛国心を奨励するためにこの書を執筆したことは十分に理由があると彼は続けている<sup>35</sup>。

かつて「未開地の野蛮な」と形容されたハイランドの地形や自然景観がイングランド人によって価値を付され、ひと括りでスコットランドの「美」とみなされるようになると、ローランド人がそれをスコットランド人の誇りとして捉えることは容易であったろう。ヘロンはスコットランド人の愛国心を育成する手立てとして、イングランドのものに勝るとも劣らない「スコットラン

---

<sup>33</sup> Grenier, p.30.

<sup>34</sup> *Ibid.*, p.16.

<sup>35</sup> Heron (1797), pp.5-11.

ド」の自然景観を、スコットランド人にとっての原風景として利用したのである。

では彼は、スコットランドの地理や景観のなかに「連合王国」を見出すことはなかったのだろうか。イングランド人向けの書でヘロンは、建前かもしれないが「スコットランドのことを知ってもらいたい」とお互いの友好を促すような書き方をしている。そして以下のように、イングランド人との同化を歓迎している感もある。

お互いに対する偏見は両者のあいだで徐々に消えつつある。服や習慣と同じように、[スコットランドにおける]言葉もイングランドのものが優勢になり始めた。一言でいえば、イングランド人とスコットランド人が、あらゆる意味でひとつの国民（原文大文字 ONE NATION）になる、その幸せな時代はさほど遠くないように思える<sup>36</sup>。

そう書いてはいるが、『記述されたスコットランド』の愛国心に関する部分に示されているように、彼の愛着心を伴う「国」への帰属意識は、郷国、あるいは祖国としてのスコットランドに向けられていた。しかし、ロンドン市民を引き合いに出していることから、彼が連合王国への帰属意識も有していたことが理解できる。また『描写されたスコットランド』において、スコットランドの地理を説明するにあたり「ブリテンのなかで一番～な」という書き方をしているが、そう表現することによって、スコットランドはグレート・ブリテン島の一部であること、そして自分が連合王国に帰属していることを書き手自身が再認識したと考えられる。

『描写されたスコットランド』のなかでヘロンは、「スコットランドは、ふたつの優れた政治的区分からなるグレート・ブリテン島の最北に位置する」とも書いている。これには、「スコットランド、イングランド両王国は、グレート・ブリテンの名をもって連合し、ひとつの王国とする」と記された1707年合同法文第一箇条を拠り所とする「スコットランドとイングランドが対等な連合のかたちで、ともにひとつの王国を形成している」という意味が包含されているといえる。彼のいう「ひとつの国民」とは、イングランド人に同化した国民ではなく、連合王国の枠組みで括られた「国民」なのである。

ところで、自然景観を利用してスコットランドの独自性を強調し、人びとのスコットランドに対する愛国心の鼓舞を試みていたヘロンは、イングランドと大差がない地形をもつ地域や、「ハイランド的」風景をもたない地域の景観をどのように認識していたのか。それは以下に明示されている。1745年の反乱後、特にジョージ3世の即位以後（彼はこの時期を吉兆期とよんでいる）、栄え続けているスコットランドの

都市は美化され、拡大を続けている。野は耕され、花が咲き乱れている。荒廃した城と泥の壁でできたコテージは、別荘や大邸宅へと造り変えられている。いまや港は商いで込み合い、製造業の施設が[イングランドとの]国境付近一帯に立ち並んでいる。農業におい

<sup>36</sup> Heron (1799), p.22.

ては、小麦、大麦、白いカラス麦、そしてイングランドで産出される多様な農作物とまったく同じものが、昔ながらの灰色のカラス麦と六条大麦に取って代わってしまった。(中略) 商業の便宜と社交の都合をはかり、あらゆる場所が広い街道と交わっている。内陸には水路が掘り開かれている。<sup>37</sup>

ローランドを主とする地域では開発が進み、その地理と景観はより人工的なもの、イングランド的なものへと変容してしまった。しかしそれは合同によってもたらされた富のあらわれであり、イングランドとの合同を支持し、その利益を享受した者にとっては誇りだったといえよう。「手かずの美しい」ハイランドの風景が「連合」によってもたらされたものなら、「人の手が入った」ローランドの景観もまたその所産なのである。

この当時、スコットランド人が連合王国へ帰属意識を有していても、それに対して愛「国」心を感じていたかどうか、たとえそうであってもどの程度のものであったかここで述べることはできない。だが、前述の「スコットランドの繁栄と発展を維持させるために、愛国心を奨励する」にみられるように、ヘロンのいう「スコットランドに対する愛国心」が、連合王国と結びついていたのは確かである。

しかしながら「真」のスコットランド愛国者とは、はたして誰のことだろうか。スコットランド人すべてがヘロンのように合同と連合体制を評価し、物理的に、概念的あるいは心象的に変わってしまったスコットランドの景観を称え、誇りに思ったのだろうか。最後に、ヘロンとは異なる観点をもった人物の目に映ったスコットランドの景観を追ってみたい。

数々の愛国的な詩を残したスコットランドの国民詩人ロバート・バーンズ（ローランドのエアシェア出身）は、1787年に「時間をかけて祖国を行脚する以上のことは何も望んでいない」とエディンバラで記し、旅を開始した。パノックバーンを訪れ、ダンファームリン・アビィでは跪き、ロバート1世の墓碑に長い時間をかけて接吻をした愛国者は、彼にとっての「嘆きの地」カローデンについては沈黙を保った。彼がなぜ何も発言しなかったのかは不明であり、真意を知るすべはない。この時までカンバーランド公爵は既にこの世を去っていたが、チャールズ・ステュアートは存命であり（1788年没）、ジャコバイトをファッション化させることになる『ウェイバリー』（1814）をウォルター・スコットが出版する以前のことであった。もし彼がジャコバイティズムに傾倒していたとすれば、当時はまだそれについて軽々しく言葉を発することができる時代ではなかったのである<sup>38</sup>。

バーンズは旅をするにあたり、ペナントやジョンソンの旅行記には目をとおしておらず、先入観なしでハイランド地域を見たようだ。もちろんピクチャレスクを崇拝する者や、彼の旅の同行者と同じように、景色や訪れた地を「ピクチャレスク」、「荒涼として荘厳」、「豊かでありロマンティック」、「野性的でロマンティックな場所」と記してはいるが<sup>39</sup>、それらは単語を羅列してい

<sup>37</sup> *Ibid.*, pp.22-23.

<sup>38</sup> Brown, pp.1, 6, 53, 62-63.

<sup>39</sup> *Ibid.*, pp.20, 53, 60.

るだけにすぎず、彼の心を揺さぶったものは風景美ではなかった。

バーズは知人に宛てた手紙に、「荒れ狂った水流が未開の山々を激しく流れ落ち、[その荒野に点在する]やせ細った野生化した羊は、未開地の住人と同じように[指導者を失い]、餓えながらも耐えている（傍点引用者）」、そういった地域を旅していると書き<sup>40</sup>、また、次のような詩を綴っている。これは旅の途中、アーガイル公爵に宿を提供してもらえなかったことに対する怒りの隠喩だといわれるが、悲惨な状態にあったハイランドの貧困とそれを目にしたバーズの行き場のない怒りが描写されているといえるだろう。

ハイランドの誇りを除けば、ここ here には何もない  
そしてハイランドの腐敗病と飢え and hunger のほかには  
もし神意が私をここ here に送り込んだとしたら  
それは間違いなく怒り an anger によって<sup>41</sup>

#### おわりに

カトリシズムの温床とみなされたハイランドは、武装解除法だけではなくプロテスタントの政府軍による開拓と踏査によって制圧され、ステュアート家復興の可能性は徹底的に排除された。そしてサンドピィの絵によるスコットランド「調査記録」は、イングランド人にスコットランドへ足を向けさせる契機になった。ウェイドがある中佐に「もしハイランド道路の利点と橋の利便性が君に楽で快適な移動 journey を提供しているとすれば、私の10年の労力は無駄ではない」と手紙を送っているが<sup>42</sup>、18世紀後半になると、ウエイドらが建設した道路は軍人に代わって旅行者に快適な旅 journey を提供した。こうしてハイランドは一般の人びとにとっても「白日のもとにさらされた」状態になったのである。

19世紀には、スコットランドの風景美はウェールズや湖水地方のものと同等とみなされるようになっていた。繰り返しスコットランドを訪れ、スコットランドの風景を描いたJ.M.W. ターナーは、スコットランドはウェールズやイングランドよりもピクチャレスクネスに富んでいると評価していた。多少の誇張はあるかもしれないが、ワーズワースは「あらゆるロンドン市民が、ローモンド湖を自分の手洗い桶にしている」と嘆くほど、1850年代までにスコットランドはウェールズと湖水地方の人気を上回る観光地となっていたのである<sup>43</sup>。これには大陸封鎖の影響もあったが、ウォルター・スコットの作品に続き、ジョージ4世のエディンバラ訪問とヴィクトリア女王のバルモラル購入、さらには鉄道網の発達とトーマス・クックが企画した団体旅行によって、スコットランドはイングランド人にとって意識的にも物理的にも非常に身近なものとなった。

<sup>40</sup> *Ibid.*, pp.6, 60-61. 原文は “savage streams tumble over savage mountains, thinly overspread with savage flocks, which starvingly support as savage inhabitants.”

<sup>41</sup> *Ibid.*, p.6.

<sup>42</sup> Taylor, p.23.

<sup>43</sup> Whitrey, p.56.

一方スコットランド人は、「連合」がもたらした景観によって得た誇りと独自性を強調し、グレート・ブリテン王国のなかにおけるネイションとしてのスコットランドの位置を主張することができた。

カトリシズムの脅威はイギリス人の自国意識の形成、国家領域「イギリス」の認識形成にも影響を与えたといえるが、「書かれること」もその一助となったといえるだろう。図や文字によって「描／書かれた」絵、地図、旅行記といった媒体をとおして、また、イメージ的になってしまうが、スコットランド自体、あるいは景観のなかに「書かれた」もの — 道や橋、碑、地名などをとおして、スコットランドがグレート・ブリテン島の一部をなし、連合王国を構成するいち地域であることが、人びとの意識にすりこまれていった。

しかしながら、「連合」や「統合」はすべての者にとって歓迎されたわけではないし、変わってしまった景観が賞賛されたわけではない。ギルピンはキリンにおいて、その地域の住人の多くがアメリカへ移住したことを聞いた。彼らはキリンから 30 マイル先のローモンド湖まで歩き、そこから船でダンバートン近くまで下り、船を乗り換えてアメリカへと渡った。ボズウェルはスカイ島で移民船を目撃して心を痛め、ジョンソンはハイランド人を移住へと走らせる政策を批判した<sup>44</sup>。現在では「スコットランドの伝統」と思われているものの真の持ち主であるハイランドの住人が、1746 年を境にして羊に取って代わられた風景もまた、「連合」が作り出した「連合王国化された」スコットランドの景観なのである。

インヴェラリとローモンド湖を結ぶ軍用道路の途中にある「休息し、感謝せよ」と刻まれた休み石の周辺に、かつてマイル標石が一緒に置かれていた。しかしスコットランド・マイル（1マイル＝1.8 km）はイングランド・マイル（1マイル＝1.6 km）と実際の距離が異なるため、その石は混乱を招くとして住民によって撤去されてしまった<sup>45</sup>。このことは、連合王国化される景観に対するスコットランド人のささやかな抵抗だったかもしれない。

---

<sup>44</sup> Pennant, pp.169-171; ジョンソン、133-139、271 頁。

<sup>45</sup> Gilpin, vol.2, p.10; ジョンソン、224 頁。

参考文献

- Bonehill, J. and Daniels, S. (eds.), 2009. *Paul Sandby: Picturing Britain*. Royal Academy of Arts.
- Broun, D. (ed.), 1998. *Image and Identity: The Making and Re-making of Scotland through the Ages*. John Donald Publishers Ltd.
- Brown, R.L., 1973. *Robert Burn's Tour of the Highlands and Stirlingshire*. Anchor Press Ltd.
- Butler, R.W., 1985. "Evolution of Tourism in the Scottish Highlands." *Annals of Tourism Research*, vol.12, pp.371-391.
- Christian, J., 1990. "Paul Sandby and the Military Survey of Scotland." Alfrey, N. and Daniels, S. (eds.). *Mapping the Landscape: Essays on Art and Cartography*. Nottingham: University Art Gallery and Castle Museum. pp.18-22.
- Daniels, S., 1998. "Mapping National Identities: The Culture of Cartography, with Particular Reference to the Ordnance Survey." Cubitt, G. (ed.). *Imagining Nations*. Manchester UP.
- Durie, A.J., 2003. *Scotland for the Holidays: Tourism in Scotland c1780-1939*. Tuckwell Press Ltd.
- Fleet, C., 2007. "The Roy Military Survey of Scotland, 1745-1755." *Scottish Local History*, 71, pp.37-41.
- Gilpin, W., 1973. *Observations on the Highlands of Scotland*. repub. the Richmond Publishing Co., Ltd.
- Grenier, K.H., 2005. *Tourism and Identity in Scotland, 1770-1914: Creating Caledonia*. Ashgate Publishing Limited.
- Heron, R. 1797. *Scotland Described: Or a Topographical Description of all the Counties in Scotland*. T. Brown Bookseller.
- \_\_\_\_\_, 1799. *Scotland Delineated: Or a Geographical Description of Every Shire in Scotland*. 2nd edn. Bell and Bradfute.
- Holloway, J. and Errington, L., 1978. *The Discovery of Scotland*. National Gallery of Scotland.
- Klonk, C., 1996. *Science and the Perception of Nature: British Landscape Art in the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries*. Yale UP.
- Malcolm, A., 1989. *The Search for the Picturesque*. Stanford UP.
- Mayhew, R.J., 2000. *Enlightenment Geography: The Political Languages of British Geography, 1650-1850*. Palgrave.
- Pennant, T., 1771. *A Tour in Scotland 1769*. John Monk.
- Rackwitz, M., 2007. *Travels to Terra Incognita: The Scottish Highlands and Hebrides in Early Modern Travellers' Accounts c.1600 to 1800*. Waxmann Verlag GmbH.
- Royal Scottish Geographical Society, 1973. "The Military Survey of Scotland, 1747-55." *The Early Maps of Scotland to 1850*, Vol.1. 3rd edn. Royal Scottish Geographical Society.
- Skelton, R.A., 1967. "The Military Survey of Scotland, 1747-1755." *Scottish Geographical Magazine*, 83, pp.5-16.
- Smout, T.C., 1983. "Tours in the Scottish Highlands from the Eighteenth to the Twentieth Centuries." *Northern Scotland*, 5, pp.99-121.
- Taylor, W., 1976. *The Military Roads in Scotland*. David and Charles.
- William, R., 2007. *The Great Map: The Military Survey of Scotland, 1747-1755*. Birlinn Ltd.
- Withers, C.W.J., 2001. *Geography, Science and National Identity: Scotland since 1520*. Cambridge UP.
- Whitrey, L. 1997. "Touring in Search of the Picturesque." *Grand Tours and Cook's Tours: A History of Leisure Travel, 1750-1915*. pp.32-57.
- コリー、リンダ・川北稔監訳。『イギリス国民の誕生』。初版。名古屋大学出版会、2000年。
- 指昭博。「イギリス化された風景」。徳橋曜編『環境と景観の社会史』。初版。文化書房博文社、2004年、143頁-167頁。
- ジョンソン、サミュエル・諏訪部仁、市川泰男、江藤秀一、柴垣茂訳。『スコットランド西方諸島の旅』。初版。中央大学出版部、2006年。

URL

<http://www.nls.uk/maps/roy/> (2010年12月1日現在)